

かつて。まだこの国に、美しい花の咲く、永遠の都があったころ。

たったひとつだけの、かけがえのないまことの愛を求め、さびしさと孤独を安らげてくれる恋をさがしつづけた男がいた。

愛をもとめた男の物語は、千年の刻を超え、世を渡っていまに伝えられる。

——男の名は、光源氏。

光の名を持ちながら、闇をかかえつづけた男。彼が愛をもとめた真の理由は、生い立ちにある。

いつの世、どの帝であつたか。昔むかしの恋物語をしほし紡ごう。

散る運命があるのを知ること、花を美しいと人は思う。

実ることない八重咲きの花のように、美しくもはかない恋の物語を、いくつも織り重ねよう。

はかなくとも美しく、千年のあいだ、聞く人たちの心を色あざやかに染めつづけてきた、花々の物語を。

初夏の夜だつた。

「気がくずれてきて、風が強くなつた。厚い雲が天をふさぐ。月も見えず、真つ暗だ。

京都の都、もつとも美しいはずの場所で、少女は、底知れない闇の中に、立つていた。

さほど冷たくはないけれど、ぬるりとしめつて気持ちの悪い風が、少女の長い髪を、くくうつと、後ろへひいた。

ぼうつと、宙に白いものが浮かび、踊っている。

「こわくない。あれに魂はないし、なにも宿っていないもの。木の枝にかかつた、一枚の衣ですもの。」

いくら自分に言い聞かせても、こわかつた。

これが仕事なら、やらなければならぬ。でなければ、自分がこの場所でくらしがいられなくなる。

「昼間、お衣裳の部屋へ風を通していたら、わたしの不注意で、風にさらわれてしまっただけの、衣なのよ。なくしたらいけない、帝さまのたいせつな衣。」

帝が住むこの御殿に、住みこみで少女ははたらいていた。更衣という、帝の着るものを用意する役だつた。おおぜいの更衣がいる中でも、新入りのいちばん下の役だつたのだ。

ここではたらく者は、名前をよべない。だれにも、人としてみとめられない。道具とおなじ

だ。役に立たなければ、捨てられる。

少女にも、ここでは、名前がなかった。

「風で、中庭の木の枝に、衣がひっつかかっているだけ、それだけだわ。」

少女は覚悟を決め、ひとりで木に近よった。ひるがえる衣の端をつかもうとしたとたん、風が強まり、音を立てて枝がしなった。衣も生きてるようにゆれた。

(こわい……。)

目がくらんだ。それでも、ひきかえすわけにはいかない。はためいて、なかなかつかめない衣へ、少女はけんめいに手をのぼし、なんとか空ふりして。

ようやくつかんだ。が、枝からはずれない。ひっばつて、たいせつな衣をやぶいてはならない。そつとはずさなければ。

と……歌が聞こえた。若者の声だ。いさきかお酒の入ったような、ほがらかな声。

「あ……。」

しかも少女がにげこみたい建物のほうから、歌が近づいてくる。まっすぐこちらへ。歌い手が、人のいるのに気づいたのだ。

「知らない男の人……こんな夜中に。あれは人なのかしら。鬼かも……！」

どこへも、にげられない。足がすくんだ。

強風の中、衣を置いてゆくこともできず、こまりはてて、少女は木の陰にうずくまった。

「おや……これは。」

たちまち若者は少女を見つけてしまった。衣が、若者のかぶった烏帽子にふれたようだ。

「鬼がでると聞いて、退治してやろうと思ってきたが、これはどうしたことかな。羽衣を忘れた天女がいる。」

りんとして、涼やかな若者の声だ。

「安心しなさい、今宵は闇夜だ。顔をかくすことはないよ。天女さん、あなたがどなたか、わたしにはわからない。」

けんめいにそでで顔をかくしながら、少女はふるえていた。この若者が鬼でない保証が、どこにあるのだろう。

若者はしばらく少女の様子をうかがっていたようだ。つうつ、と立つ気配がする。

「さあ、これを。」

薄い衣がふわりと、少女にかけられた。枝から衣をはずしてくれただのだ。風で舞いそうになり、少女が急いで衣をつかんだ……そのとき。

手をにぎられた。若者の手、温かくて大きくてたよりのある肉厚の手だ。少女はめまいをおぼえながら、とにかく顔をそでで覆った。

「かくすことはないだろう？」

若者がそでをとりけようとす。彼の吐息が少女のひたいにかかった。

「……美しい、羽衣を返せば、たちまち天へ昇っていきそうな。」

「おゆるしくださいませ……。」それだけ言うのが、せいじつぱいだった。

かまわず、若者は強引に少女のそでを降ろさせて、あごをひきよせた。

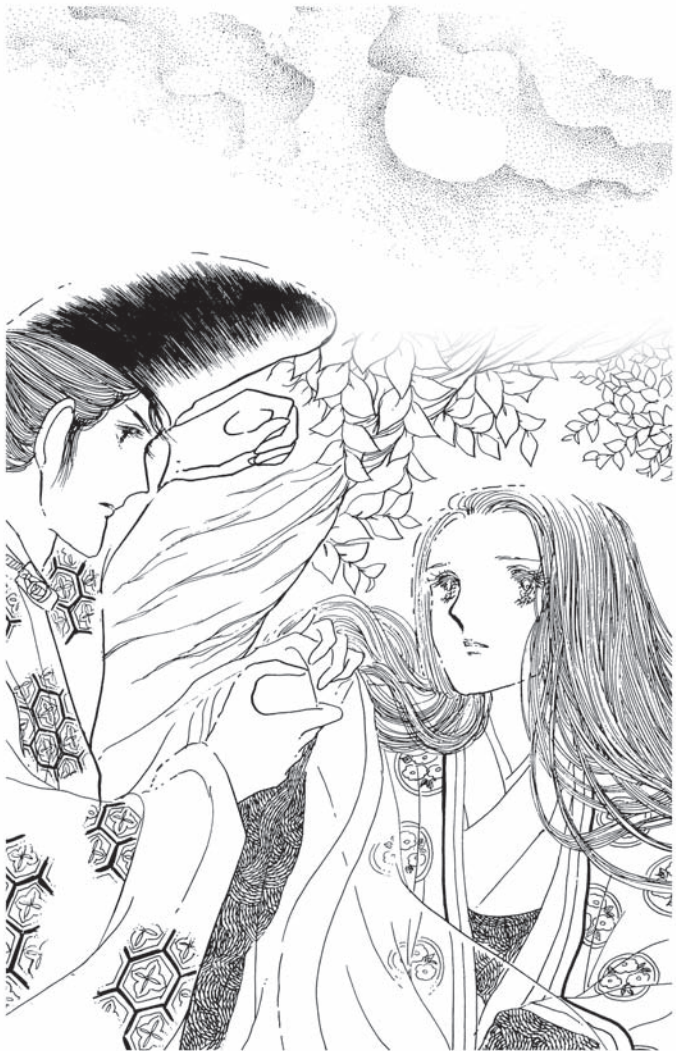
一瞬、雲間から月光がさした。目を焼かれた気がして、少女はぎゅつとまぶたを閉じた。お酒のにおいと、うつとりするような甘い香りがした。

「あなたが天女なら、わたしは月読……月の精だ。人ではない月に顔を見られて、はずかしいことがあるのか？」

彼の手が離れる。

やさしいささやき、なにも起こらない。少女はおそろおそろ目を開けた。まだ、若者はそこにいた。少女を捕らえられるすぐそばに。

存在感……黒い影だけで、顔は見えなかった——また、光がさした。一瞬だけ。



たしかに、ひとみが見交わされ……。

「お帰^{かえ}りなさい。だれにも言^いいはししない。」
はつとなり、衣^{えも}を手^てに、少女^{しょうじょ}は身をひるがえして駆^かけさつた。

(どのような家^{いえ}がらの貴公子^{きこうし}だったのかしら……おやさしそうな、あの男^{おとこ}の方は。)

胸^{むね}の奥^{おく}が熱^{あつ}くて、その晩^{ばん}、少女^{しょうじょ}は眠^{ねむ}れなかった。

顔^{かお}ははつきり見えなかった。強い光^{ひかり}を受けたひとみだけ、おぼえている。

若者^{わかもの}の言葉^{ことば}は飾^{かざ}らず、さりげない。けれど、あれほどおだやかで、やさしいささやきを聞いたのは、初^{はじ}めてだった。

いつだって、御殿^{ごてん}の雰^{ふん}囲^い気^きはぴりぴりと張りつめていた。はたらくだれの声^{こゑ}にもとげがあり、言葉^{ことば}は刀^はの刃^はをちらつかせたように、冷^{つめ}たくてするどかった。

(この氷^{こおり}のような御殿^{ごてん}に……あのような方^{なた}も、いらしたのかわ。)

救^{すく}われたと感じた。

(わたくしもここにいっても、いいのかもしれない。)と、わけもなく思^{おも}った。

あの若者^{わかもの}と、帝^みの更衣^{こうい}の仕^し事^じに関^{かん}係^{けい}はないけれど、少女^{しょうじょ}がここで、心^{こゝろ}を持^もって生^いきていてもい

いような……道具^{どうぐ}ではなく、人^{ひと}として息^{いき}をしていてもいい、わずかな空^{くう}間^{かん}が生^うまれたような気がした。

少女^{しょうじょ}はある貴族^{きぞく}の娘^{むすめ}だった。さきごろ父^{ちち}を亡^なくして、更衣^{こうい}としてはたらくため、自^じ分^{ぶん}の世^せ話^わを

する乳母^{めのと}とともに、御殿^{ごてん}へあがったのだ。

ここでは、たとえ貴族^{きぞく}の姫^{ひめ}でも、はたらく者^{もの}は名^な前^{まえ}をよんでももらえない。ただの更衣^{こうい}だ。名^なもないおおぜいの中^{なか}の、ただのひとりだった。

それから数^{すう}日^{じつ}して。乳母^{めのと}があわてふためいて少女^{しょうじょ}をよんだ。

「姫^{ひめ}さま！ このようなものがお部屋^{へや}の前に。」

黒漆^{くろつくり}がつややかにぬられた、金蒔^{※1 金蒔絵}絵^えの箱^{はこ}だ。

乳母^{めのと}がこわごわ開^あけてみる。

「まあ、なんとりつばな貝^{かい}のお道具^{どうぐ}。」
貝^{かい}合^あわせの、ひとそろいだつた。

「いったいどなたが？」

「それが、使^{つか}いの者^{もの}も名^なを告^つげずに去^さってしまひまして。後^{うし}ろ姿^{すがた}を



※1 金蒔^{きんまき}絵^え 黒漆^{くろつくり}を塗^ぬった上に、

金色^{きんいろ}の絵^えの貝^{かい}で描^かかれた絵^え。

※2 貝^{かい}合^あわせ 貝^{かい}殻^{がら}の美^うしき、め

ずらしさを競^まう貴族^{きぞく}の遊^{あそ}び。

もうひとつの新しい「源氏」誕生

わたしの描いた『あさきゆめみし』は、ごぞんじのとおり、古典「源氏物語」を少女漫画というフィルターにかけて抽出し、十五年ほどかけて描きあげた作品です。

当時は、ビジュアルの資料も乏しく、絵にするにもたいへん苦労したのですが、やはり千年を読み継がれてきたこの名作を読みこみ描いてゆくのも、苦しいながらも楽しい、やりがいのある仕事でした。

その『あさきゆめみし』を今度はジュニアのみなさまのために、さらに小説というフィルターにかけて抽出しているのですから……たぶん古典とはまた別の新しい物語になっているかもしれない。

「源氏物語」が書かれた藤原摂関政治の絶頂期は、それまでの唐や朝鮮半島の文化を脱して、日本独自の文化が生まれつつあった時代です。「大和魂」という言葉が最初に使われたのが「源氏物語」であったことはごぞんじでしょうか。この古典は昔から歌舞伎をはじめ多くの舞踊（バレ

エにもある）、香道、書道など、ほとんどすべての芸術分野において題材となっています。現代語訳も数多く、「語り」としても取りあげられます。国風文化が生まれた時代、日本の文化のルーツがこの物語の中におさめられているせいかもしれません。

本書は漫画『あさきゆめみし』を下敷きに文を起こしていますが、みなさんにとつては読みやすく感情移入しやすい形で、少年・青年期の源氏や姫君たちの悩みや恋を描いています。また時代背景やみんなが大好きなスピリチュアルなシーンもたくみに取りいれてあって、とても楽しめる本となっています。

古典↓漫画↓小説と変化してきたこの新しい「源氏物語」を、どうぞ難しいことは抜きにして、ドキドキワクワク登場人物になりきって、楽しみながら読んでいただきたいと思います。

そして気に入ったなら、いつか本来の古典「源氏物語」に挑戦してみてください。そうすればまた、あなただけの新しい「源氏物語」が誕生することでしょう。